

大の風が到底この頭を外にしては求め難いと共に既に圖中に永納の極書ある事からも、相當に之を溯るものとせねばなるまい。之を繰返せばこの大味な點も亦桃山畫の一風、よく一世の障屏の汎濫を産んだ所以と解し得るであらう。而も本圖は一般の襖繪に比して保存殊に完好、よく畫法の長短を併せ見るのを幸とするが、唯雲金の縁に配した胡粉隈の大部が剝落し去り、夏隻左端の圓石が骨描を露呈し、また同隻の白鷹の頭部に顯著な補墨のあることを書添へて置く。

厨子屏繪

解説

米國

ボストン美術館藏

東京美術學校藏

東京内田耕三氏藏

表は落着いた朱漆の地に、全體の均衡からは稍重々しく感ぜられる位に八雙

金物と乳座を打ち、召合せ縁

厨子屏

東京美術學校藏

るに至つては、我等の如き専門の技法に暗く、且髹漆遺品の多くを精査する機會を有せざる者としてはその何れに適從すべきかに苦しまざるを得ない。唯裏面に描かれた繪畫に就て見るに、その下地漆の上に顔料を以て描出することは、支那中世の遺品にその類例ありや否やを詳かにせぬが、寧ろ本邦に於てかゝるものに關する技法として通途のものである。尊像は何れも海波騒めく中に湧出する岩盤の上に立つ像である。岩盤上跏趺座を布き、頭光を負ふ六體は本邦の儀軌を以て律すれば恐らく十二天に當り他の二尊は龍王と考へられる。圖様から云ふならば海中に湧出する點を最も特異の點とし、技法の細部に就て見るならば、梵天の面貌、毘沙門天の胸甲に見られる人面、毘沙門龜甲の描法、手足の指及爪の特に長く描かれてゐる點等、何れも本邦傳來の形相としては甚だ特異とすべきで、唯尊名を擬定するに假に本邦在來の儀軌、圖像を以てすれば、東京美術學校所藏のものを風天、毘沙門天、内田耕三氏所藏のものを火天、炎

摩天、ボストン美術館所藏のもの

に、小さいながら如何にも重味ある風情を持ち、裏は棗地に下地漆を施しその上普通の顔料を以て各屏一體宛護法天王と思はれるものを描く。今髹漆專家の見に聞くに、この屏の製法より見て之を支那大陸に於ける製作と見るものと、本邦に於ける普通の製作とするものとの兩説に別れる。しかもその特徴として擧ぐる所が兩説何れも共通であ

を伊舍那天、帝釋天及難陀、跋難陀の二龍王と判じ得べく、その細部に互つて假令小異はありとしても、本邦傳來の儀軌を以てかく的確に判定し得ることは、この畫を支那製と考ふべく甚だ不可思議とすべき點である。この畫を假に日本に於ける製作と考ふるならばその稍鈍重なる描法、軀幹の動きの固定化せる點、波頭の稍形式的な描出等より見て當然足利期に入る頃の製作と見るべく、之を大陸に於ける製作と考ふれば、かの

宋元期の入つて我が製作の規範となつた諸作品の夫に比すれば固より、粗笨、同型化せることを認め、又支那若くは朝鮮に於て製作され、放大な畫面を有して、多く明代中葉頃の年記を署する佛畫の若干諸寺に藏せられてゐるものがあるが、略之等に近い畫體を示し、稍古様を呈するものあるによつて、先づ明代初中葉の間のもとの鑑すべきであらう。唯如何にも不審とすべきは多くの佛像の様式が海の彼此によりて

住吉縮圖 厨子扉繪

甚だ異なり、特に明代以降の佛畫の多くにあつては、

一見彼地の作と見得るべき特徴を具へてゐるものであるのに、こゝに見られるものがさほどまで顯著な特質を現してゐないことである。又十二天は我國にあつてこそ、密教の法流が脈々と傳承され、特に十二天は特殊に取扱はるゝ等(十二天には本誌第六十號渡邊一氏「東寺十二天」にその我國に於ける信仰上の位置に關し一斑が述べられてある。就て參考され度い。)のことがあつて、この時代に護法諸天として扉に

圖繪さるゝことに何等の不審もないが、海西に於ける當時の密教の様相、殊には十二天に關しては吾人は何等知る所がないので、果して十二天が扉繪に描かれる程彼地に於て人に熟知されて居たものであるか否かすら明瞭でない。又假に然りとしてもその形相等は本邦に於ける像軌とは餘程の變遷を経てゐるものではないかと想像されることである。然らずんばこの扉は支那に當時本法と甚

だ相似た十二天の形相の、相當に廣く行はれたるべき一證と考へざるを得ないのであつて、その考察を進展せしむるときは甚だ重要にして且困難な問題に逢着する懼がある。故に扉繪を中心として見る我等の考はとかく之を本邦製作と見るに傾き易いが、早急の斷定は之を避けて更に諸家の垂教を期待することとしたい。

東京美術學校藏

因に言ふ、東京美術學校には住吉家に傳へられた粉本類を多數に收藏するが、その内に偶然にもこの扉繪の東京美術學校所藏の分の摸本が存し、之には天保十三年の留書が存する。その摸本は誠に忠實を極めたもので、細部の如き現在の薰黝せる畫面からは到底寫し出せぬと思はれる箇所さへ精細に寫されてゐるのである。天保末年に住吉家に之が贖された際には既に二面のみであり、且そ

れがその當時はかくも明かに見ながら、現在は肉眼を以てしては圖様も定かならぬ如く薰染してしまつたといふことは、或はこの厨子がその頃近くまで厨子の形のまゝ町重に護持され來つたが爲に、當時は分離後左程の時代を経ず完好の狀を留めてゐたもので、遊離した扉として流轉する僅か百年程の間にかくも甚しく汚染を増したものであらうか。